

1955: フリーダム

歴史への飛躍

1955年7月、コー会議場での1週間を終えたアフリカ代表団は、移動する準備ができていました。彼らはホストにこう言いました。「私達はコーでの滞在を楽しみました。今度はヨーロッパをもっと見て回れるように手配していただけませんか」。

翌朝、MRAの創設者であるフランク・ブックマンはアフリカの一行を招集しました。政治家、労働組合のリーダー、ビジネスマン、学生など、さまざまな国から集まった人達の殆どが独立を目指し闘っていました。「昨夜はずっとアフリカのことを考えていました」とブックマンは彼らに言いました。「アフリカは、東洋と西洋の間で引き裂かれるものではなく、東洋と西洋の双方に答えを与えるのです。それは劇という形かもしれない。劇を書けると思いませんか？」

「私たち30人のアフリカ人が昼食後に集まりました」と若いナイジェリアの大学卒のイフォガーラ・アマタは回想しました。「すぐに私たちは劇で何を伝えるべきかについて熱い議論を始めました。そして誰かが静かな時間を持つと言いました。自分たちの考えをまとめてみると、筋書きの骨組みができました」。

南アフリカの教員のリーダー、マナセ・モエラネ、ケニアのアベイ＝イファー・カーボ、そしてアマタが、それぞれ1幕ずつ書くことを志願しました。翌朝、彼らは草稿を他のメンバーに読み聞かせ、5時にはブックマンに劇が完成したことを伝えました。

その1週間後、アフリカ人たちはコーの劇場でこの劇を上演し、アマタとモエレーヌは独立を目前にしたアフリカのある国の2つの政治派閥のリーダーを熱演しました。この劇では、イデオロギー、人格、部族によって分断された人々の間に融合をもたらす心の変化が描かれています。これが傲慢な植民地総督の偏見を解き、この国の自由への道を容易にしました。

ブックマンは早速、彼らが『フリーダム』と名付けたこの劇を翌週ロンドンで上演すると発表しました。モエレーヌは「私たちは歴史に名を刻むことになった」と言いました。数ヶ月のうちに『フリーダム』はロンドン、パリ、ボン、ベルン、ジュネーブ、ヘルシンキ、コペンハーゲン、ストックホルム、オスロ、ミラノで3万人のヨーロッパの人に観られました。観たいという人があまりにも多かったので、私たちは映画を作ることにしたのです」。

撮影は1956年にナイジェリアで行われました。2,000人以上の人々が資金を提供しました。俳優やスタッフの何人かは、無給で参加するために仕事を投げ出しました。総督役を演じた引退した英国の植民地行政官ライオネル・ジャーディンを除き、俳優たちはアフリカ全土から集まりました。

2人のカメラマンはスカンジナビア出身でした。一人はディズニーで働いていたスウェーデン人のリハルト・テグストロム、もう一人はフィンランド最大の映画会社スオミ・フィルムと契約していたフィンランド人のアイモ・イエーデルホルムでした。あるシーンでは、1万人のエキストラが参加するカヌーレースがありました。「暑さと騒音のため、撮影の多くは夜間に行われた」、「フィルムは暑さで膨張しないように肉屋の冷蔵庫に保管され、編集のためにロンドンに空輸された」と監督のアシスタントのロエル・フェレイラは書いています。

『フリーダム』は、アフリカ人が脚本と演技を手がけ、アフリカで撮影された初の長編映画だと言われています。

多くの言語に吹き替えられ、世界中で上映されました。ケニアでは 1963 年の独立に向けて 100 万人がこの映画を観ました。

『フリーダム』はどこで観られようと、それは永続的に人々の人生に影響を与えました。アメリカのディープ・サウスに住む若いジャーナリスト、ロバート・ウェブは、1957 年の会議でこの映画を見ました。彼は後に、この映画が「私の人種差別主義者の心に杭を打ち込んだ」と書いています。「映画の後『初めて会った黒人』はたまたまアフリカ人でしたが、彼に謝罪しました。その時の彼の返事を忘れることが出来ません『謝罪の後は？』。それ以来、私はその質問に答えようとしています」。

ウェブはシンシナティ・エンクワイアラー紙で輝かしいキャリアを積みました。2018 年に死去した彼の追悼文は、「最も深い傷を癒し、最も苛烈な溝を埋める力としてのジャーナリズムに対する彼のビジョン」について語っています。

メアリー・リーン
劇を書けると思う？



Ifoghale Amata



Manasseh Moerane



Film crew



The cast and company of Freedom in Kiruna, Sweden, wearing army clothes they were given against the cold